

# 和紙がつなげる人と森

高知大学地域協働学部講師 田中 求

## 1. 日本文化の基盤としての和紙

日本の様々な文化のなかで、和紙はいろいろな形で用いられ続けてきた。神社の御幣や注連縄、団扇、扇子、相撲の化粧まわし、襖や障子、屏風、正月飾り、盆提灯、紙幣、和傘、花火、書道、日本画、版画、掛け軸、短冊、折り紙など、どれも日本の暮らしに根付いてきた文化である。日本の宗教や行事、芸術、伝統工芸、家屋、趣味、生活全般において、和紙は多くの人々にとって身近な存在であった。特に和紙の透光性や調湿性、温かみ、風合いは木造建築や和室とともにあることで、その特徴や魅力をさらに発揮することができる。和紙は四季の変化の中での人々の暮らしを彩る素材として利用されてきたのである。

それだけではない。和紙やその原料は日本の自然や風土のなかで生産され、地域社会そのものを形成する重要な要素でもあった。しかしながら、地域の自然や生活スタイルの変化、また洋紙や海外原料が増加する中で、和紙を基盤にした文化も、地域社会も変わりつつある。本章では、和紙やその原料、栽培加工を通じた人と森、自然とのかかわりについて紹介しながら、その変化と様々な課題、さらには新たな可能性を探っていくこととする。

## 2. 日本各地に広がる和紙の産地

和紙は、清浄な水や空気、日当たりの良さなどの自然条件を活かして生産されてきた。山村には原料を栽培する農家や加工業者がおり、中下流域に紙



写真 1 コウゾの古株と栽培者の  
黒石正種さん・菊野さん



写真 2 簀や桁を用いて紙を漉く  
浜田治さん

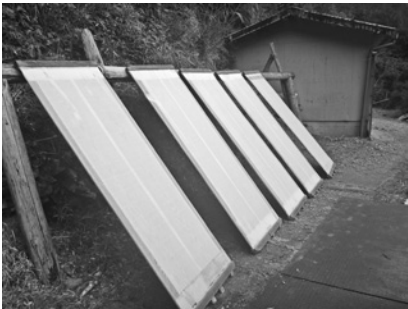


写真 3 干し板で天日乾燥される和紙

漉きの工房や簀桁などの用具製作者、仲買や問屋、紙販売者などが連なり、和紙を核にして地域社会が形成されていた。越前や美濃、土佐など千数百年あまりもの歴史を持つ和紙産地をはじめ、日本各地に形成された和紙産地は、清流とそれを取り囲む山々の中に形成されてきたのである。

また和紙の生産には様々な山野の資源が活用され、また林業と共通する道具も用いられた。和紙原料であるコウゾやミツマタの枝を収穫する際には、磨き丸太用に京都北山などで使われてきた枝打ち鎌などでスパッと切ることが好まれた。そうすることで切り口の治癒が早まり、株が弱るのを防ぐことができた。大事に利用されてきたコウゾの株のなかには数十年から100年以上も毎年3～4mも枝が伸び、収穫し続けられるものもある（写真1）。高知県では山からコウゾやミツマタを下ろす際に林業での集材技術を活かして架線が用いられており、昭和40年代頃までは尾根から尾根、谷へとあちこちに掛けられた架線が蜘蛛の巣のようであったという。

紙漉きをするために用いられる桁には、水に浸して激しく揺るなど酷使しても狂いが出ない木目の通ったヒノキが好まれ、簀にはタケやカヤなどが用いられた（写真2）。紙を天日乾燥する際に用いられる干し板には狂いが出

少なく、表面がなめらかなイチョウが重用された（写真3）。様々な山野の資源の特徴を活かし、また林業用の道具や技術も用いながら、和紙やその原料が作られてきたのである。

山村の人々は、多くの生業を持ってきた。田畑を耕し、木を植え、狩りをし、牛を飼い、そして冬には紙漉きをする人々もいた。コウゾやミツマタの収穫や加工も12月から2月頃にかけての冬の仕事である。和紙に関わる生業は、山村の冬の風物詩でもあった。

### 3. 和紙原料の栽培と植林

和紙原料であるコウゾは、カジノキ (*Broussonetia papyrifera*) とヒメコウゾ (*Broussonetia kazinoki*) の雑種とする説があり、アカソやカナメ、タオリ、アオソなど様々な葉や茎の形状、繊維の特質を持つ品種がある。コウゾは、ミツマタ (*Edgeworthia chrysantha*) などとともに、日本各地の山村で栽培されてきた。栽培が困難なガンピ (*Diplomorpha sikokiana*) は山に自生しているものを採集した。山村の子どもたちにとって、ガンピ採集は大事な小遣い稼ぎの一つであった。

コウゾとミツマタは水はけの良い斜面で栽培された。いずれも山の地形や土質などに適した植物であり、山村の重要な収入源であった。コウゾやミツマタは4月から9月頃までグングンと枝を伸ばし、皮を厚くしていく。そして寒さが厳しくなり葉を落とす冬に、枝を切り落とし、皮を剥いで残った白皮（韌皮繊維）が和紙の原料として利用される（写真4）。

コウゾは、日当たりが良く強風などが吹き込みにくい山の斜面で栽培されるほか、家屋周辺などの常畑や田の畦、もしくは雑穀などの焼畑の後作としても栽培された。和紙の原料としてのコウゾの栽培適地は、標高150mから600mの傾斜地で、日当たりと水はけの良い南西もしくは



写真4 白皮を干す茨城県大子町の  
齊藤邦彦さん

は東斜面であり、強風が当たりにくい場所が好まれた（農林省高岡農事改良実験場 1950）。

那須コウゾといわれる高質な原料の産地である茨城県大子町では、久慈川の支流沿いの南西斜面にコウゾ畑が広がり、その斜面を背負って家屋がある（写真 5）。川沿いを吹き抜ける風が過湿によるコウゾの発病を防ぎ、日当たりと水はけの良い斜面は生育を促す。収穫した枝は少し担いで家まで運べば、そこで加工作業をすることができる。コウゾ栽培の聖地のような独特な景観である。

高質な和紙原料となるミツマタの栽培適地は、標高 200 m から 1000m、水はけが良く直射日光が当たりにくい北もしくは北東・北西の斜面であり（農林省高岡農事改良実験場 1950）、トウモロコシやムギ、ダイズなどで日陰を



写真 5 斜面に母屋とコウゾ畑が広がる茨城県大子町の農家



写真 6 高知県の町柳野地区のコウゾの株（左下）とミツマタ（右下）の畑

作り栽培された。ミツマタは、数年ごとに新たな場所を伐開して焼畑とするサイクルのなかで栽培されていた。ミツマタは連作すると白絹病などになりやすく、また直射日光を好まず、その他の作物の被陰下でもよく育つという性質を持つことから、焼畑のサイクルと組み合わせながらの栽培が広がったのである。山村を取り囲む山々の初春は、ミツマタの白黄色の花で包まれた（写真 6）。コウゾもミツマタも山や山村の景観を形作る植物でもあったのである。

しかしながら昭和 20 年代後半以降、スギやヒノキなどの植林が活発化すると、焼畑の作物の間にスギやヒノキの苗木が植えられるようになった。ミツマタは 3 年に 1 回、大きくなった枝を収穫することが多く、それを 2 回、計 6 年間行う間

にスギやヒノキの苗木が育ち、焼畑用地は人工林に変わっていくこととなった（田中 1996）。現在でも、神奈川や兵庫、高知などのスギやヒノキの人工林の下にミツマタの群落が広がっていることがあるが、かつて焼畑で栽培されていたミツマタが残ったものである可能性がある。コウゾについても山畑への植林が進み、現在では家屋の周辺などで栽培されるにとどまることが多くなった。

#### 4. 和紙と原料栽培を巡る問題

コウゾの国内での栽培面積は、1915年には23,790ha、ミツマタは25,229haであったが（農林大臣官房統計課1926）、2013年にはそれぞれ35.9ha、48.2haと激減した（日本特産農産物協会2014）。和紙の需要も、生活スタイルそのものの変化に伴う和室の減少、紙幣や教科書、株券などの洋紙化や電子化、和紙を素材として利用してきた伝統工芸や様々な行事、趣味などの衰退により、減少することとなった。特に手漉き和紙の減少は著しい。国内の代表的な和紙産地の一つである高知県でも、手漉き和紙生産量は1951年の1688tから2005年には13tにまで減少した（高知県商工振興課2006）。その一方で和紙そのものが多様化しており、和紙とは何かを明確に定義することも難しくなっている側面がある。洋紙は木材パルプを原料にした機械抄きの紙が主であるが、近年は、手漉き和紙であっても原料にパルプを用いたものや、機械抄きのものも増えている。和紙原料栽培の衰退要因として、和紙需要の縮小のみでなく、栽培立地や生産性の問題、国産原料価格の低迷や生産者の高齢化、さらには獣害の増加などが挙げられる（田中2014）。

斜面に広がる和紙原料の畑は運搬機材などを入れにくく、長くて重い枝の束を担いで上り下りせざるを得ない立地にあり、特に高齢者にとっては困難な力作業が必要である。ま



写真7 コウゾの皮むきをする  
筒井富子さん



た株を傷めることがないようにチェーンソーを使わず鎌などで丁寧収穫するほか、枝を蒸して皮を剥くのも手作業である（写真7）。手間の掛かる収穫や加工などの手作業は、かつては他の栽培農家とのユイなどの労働交換で行われていた。しかしながら、栽培農家が減少するに従い、非栽培農家を雇用して行わざるを得なくなり、和紙原料は収入源としての魅力を減ずることとなった。

国産原料価格の低迷については、国産の10分の1から半額程度であるタイや中国、フィリピン、パラグアイなどからの輸入原料の増加や、生産者の高齢化により手入れ不足のコウゾ畑が増え、ネナシカズラなどの巻き付きによる傷がついたり、株の植え替えがされずに繊維が固くなり品質が低下したことが要因と考えられる。現在、和紙産地によっては9割以上を輸入原料に依存するようになっている。

しかしながら、国産の和紙原料や和紙そのものについての必要性が失われているわけではない。繊維が粗く脂肪分が多い輸入原料を用いた和紙は、熱処理する際にシミなどが浮き出たり、墨がはじかれるなどの問題がある。さらに輸入原料は漂白などの処理過程で靱皮繊維を劣化させる化学薬品を用いることが多く、長期間の保存性が必要となる国宝級の文化財などには使用できないため、国産原料を求める声が消えることはない。

特に2014年11月に「和紙：日本の手漉和紙技術」として石州半紙・本美濃紙・細川紙の手漉き技術がユネスコ無形文化遺産に登録されたことで、国産原料を求める声がさらに強まっている。これらの登録を受けた和紙は、国産コウゾのみを利用することとされているが、2015年に入り必要な原料が確保できない産地が生じているほか、数少ない原料を巡り買い占めに走る業者も生じつつある。また国産ミツマタは、1万円札などの紙幣の原料の一部にも用いられてきたが、生産量不足のためネパールや中国からの輸入原料が9割を占めるようになっており、生産量の増加が必要である。

2010年には公共建築物等における木材の利用の促進に関する法律が施行され、木造の公共建築物も増えつつあるが、和紙の調湿性や透光性、温かみを組み込むことで、木造建築の特性や木材の風合いを活かすことができよう。障子や襖のみでなく、ランプシェードや壁紙などでの和紙の活用が広がっており、建築物や屋内での和紙の機能が見直されている側面もある。

その一方で、原料栽培者は高齢化しており、全国一の生産量を誇る高知県をはじめ、その他の産地においても主な生産者は70代もしくは80代であり、後継者もおらず十分な手入れができない畑が多い。聞こえてくるのは「今年だけ今年だけ」と思いやっている」「できる範囲だけ、やれる分だけでしか作れない」というような声ばかりである。近年は、日当たりの良い斜面にあるコウゾ畑に目をつけた業者によるソーラーパネル設置が各地で進んでおり、山村の景観がガラリと変わってしまった地域を目にすることもある。

またコウゾについては、その芽立ちや葉がイノシシやシカ、サルの食害に遭いやすく、特に5、6月の芽立ちを食べ尽くされた株は枯れてしまうことが多い。高知県では2010年頃からイノシシやシカ、サルによる食害が深刻化し、栽培を諦めた地域まで生じている。那須コウゾの産地である福島県との境に近い茨城県大子町については、2014年頃から福島県側から増え広がってきたとみられるイノシシもしくはイノブタによる食害が発生し始め、コウゾがほぼ全滅するような畑までが生じており、栽培者のやる気を大きく削いでいる。1000年以上にわたり、日本各地に形成されてきた和紙の里は、このまま消えてしまいかねない現状にあるといえよう。

## 5. 和紙と原料栽培が持つ可能性

コウゾやミツマタは、山村での栽培に合う植物であり、和紙の原料としていろいろな人をつなげ、地域の自然を活かした生業を生み出し、和紙の里とも呼べるような景観と社会と文化を形成してきた。その生産量は減少しているものの、コウゾやミツマタが持っている様々な特性や機能を活かすことで、獣害や耕作放棄、再造林放棄、収入源の少なさ、高齢化など日本の山村が抱える様々な問題を解決できる可能性がある。

まず獣害である。コウゾへの食害が生じているのに対して、有毒であるミツマタはシカやイノシシなどの食害に遭いにくい。そのため、森林に隣接した場所で栽培する場合でも電柵や駆除などの対策が不要である。何を作っても動物の食害に遭うような場所は耕作放棄地になりかねない。さらにそこに居着き繁殖した野生動物が周りの田畑も荒らすようになり、耕作放棄地が広がるという問題もある。そのような場所でもミツマタは栽培でき、コウゾな

どの獣害に遭いやすい畑の周囲を密にミツマタで囲むことで、獣害を回避できる可能性がある。ミツマタは種で苗木を増やせるため広い面積に植えられるほか、ある程度密に植えることで下草が生えてきにくくなるため、植えた後の管理も容易である。

近年、木質バイオマスなどに利用するためのスギやヒノキの伐採が進む一方で、採算性の低さから再造林放棄地が増加し問題となっている。伐採後の選択枝として、獣害に遭いやすいスギやヒノキを再植するのではなく、食害がなく栽培法や利用法なども確立されているミツマタを栽培するというのも良いのではなかろうか。スギやヒノキなどの長伐期施業は、収穫し利益を得るまでに長い年月が必要であり、特に山村の小規模林家については、植林からほとんど利益を得られぬまま管理放棄が進んだ側面がある。ミツマタはスギやヒノキなどの被陰下でも栽培でき、長伐期施業と組み合わせた森林の形成も可能である。

山村における収入源の確保という問題に対しても、ミツマタは植栽後3年で収穫でき、紙幣用のミツマタとして組合を作り出荷すれば、品質に応じて印刷局が1kg3000円ほどで購入してくれるため、反収20万円以上が可能であり、山村の収入源としても再活用しうる。繊維が密であり、透かしなどの紙漉き技術にも利用しやすいミツマタは、校章の透かしを入れた卒業証書などを漉くこともできる。

またコウゾは山村の重要な収入源であるコンニャクと組み合わせた栽培ができるという特性を持っている。高知県の山村ではコウゾとミツマタ、そしてコンニャクが主要な収入源であり、そこに畜産や茶、養蚕、山菜などが加わって、生活が成り立っていた。コンニャクは乾燥や強風に弱いため庇陰植物が必要であり、コウゾがその役割を担うことでコンニャク栽培が日本各地の山村に広がってきた。

コウゾとミツマタ、コンニャクの収穫や加工、販売は冬の時期に行われ、それで様々な支払いを済ませ正月を迎えることができた。現在、コウゾとコンニャクを混作している畑の反収は20万円ほどであり、加工方法の工夫や新たな販路の確保などにより、さらに反収を上げることもできる。コンニャクは食用になるだけでなく、コンニャク糊を和紙に塗ることで水や擦れ、破れなどに非常に強くなり、和紙の用途をさらに広げる原料でもある。



近年、どの山村においても耕作放棄地が増加し、多くの田畑や山林が売られ、貸し出され、また放置されている。そのなかで、移住者などの外部者がこれらの土地を利用しやすくなっており、地域との信頼関係を形成できれば3～5反ほどの農地を手に入れることは決して困難なことではない。しかしながら、この数年の間にこれらの農地を受け継いで利用しなければ、そこは荒れてしまい、誰も利用したとまらない場所になるであろう。山村の農地は限られるため、各地域で受け入れられる移住者の数は多くはないが、山村で受け継がれてきた和紙原料は、移住者にとっても重要な冬の収入源になり得る。特に2014年以降、どの和紙産地においても国産原料を求める声が高まっており、筆者のところにも頻繁に原料の問い合わせが来るようになってきている。和紙の市場は縮小したものの、それでも原料が足りておらず、特に長期的に安定して原料を供給してくれる若手農家とのつながりを求める和紙生産者が多いのである。

山村の少子高齢化については、ミツマタやコウゾ、さらにはコンニャクも移住者の収入源になりうるほか、収穫や加工などの様々な作業において共同での作業が必要であることが、山村にいろいろな人のつながりを作り出す可能性がある。筆者自身も5反あまりの畑を借りてコウゾやミツマタ、トロロアオイ、コンニャクなどの和紙原料を栽培しているほか、栽培農家の手伝いや販路の確立支援などを行っているが、一人で畑に入り黙々と草引きや収穫、運搬、枝の皮むき加工などを行うのは苦痛の連続であることが多い。

しかしながら、他の農家や学生などとの共同作業は楽しく、またいろいろな技術やコツを覚えたり、ワイワイと様々な話題で盛り上がるなかで、畑の特徴や歴史なども学ぶことができる時間でもある。紙漉きそのものについても、技術的にも体力的にも難しい作業が多いものの、初心者や子ども、観光客などが紙漉き体験をする際に行われる溜め漉きなどの技法は、紙漉き経験のない移住者や原料栽培者でも修得することができ、自分で栽培した和紙原料で紙を漉き、それでお土産物を作ったり、紙漉き体験の指導をすることも可能である。

「和紙」という言葉が持つ響きや印象は外部者や移住者を惹きつけ、さらに畑ではコウゾやミツマタの繊維の美しさと強さに触れ、植物の繊維を紙にするという発見と発想、工夫の一端を追体験することもできる興奮がある。

和紙は、手紙や絵画などでいろいろな思いを人に伝えるための素材であるのみでなく、その原料の栽培や加工、紙漉きを通して、多くの人々をつなげていく可能性を持っている。また和紙原料栽培は地域の景観の基となり、生活のサイクルを作り、冬の収入源にもなり、また野生鳥獣と上手く付き合っていくための土地利用法にも結びつけることができる。季節の変化や様々な伝統工芸、行事、調湿性や透光性、温かみなどのある家屋、木を使った暮らしのなかで、和紙は大事な素材として様々な役割を果たしうる。地域の自然を活かし、多くの人に関わる中で生み出されてきた和紙は、人と自然、人と人をつないでいきながら、新しい生活や社会、文化、自然との関わりのあり方を伝えてくれるのである。

〔参考文献〕

- 高知県商工振興課（2006）高知県紙及び製紙原料生産統計、24pp.  
日本特産農産物協会（2014）特産農産物に関する生産情報調査結果、10-13.  
農林省大臣官房統計課（1926）大正十三年第一次農林省統計表、39.  
農林省高岡農事改良実験場（1950）製紙原料の栽培、85、高知県経済部紙業課。  
田中求（1996）山村における山と林家の関わりの変容—高知県吾川郡吾北村柳野本村集落の事例一、森林文化研究 17、83-96。  
田中求（2014）和紙原料生産を巡る山村の動態—高知県の町柳野地区の事例一、林業経済研究、60（2）、13-24。



田中 求（たなか・もとむ）

高知大学地域協働学部講師。東京大学大学院農学生命科学研究科博士課程単位取得退学。専門は環境社会学・林政学。日本やメラネシア、東南アジアの農山漁村を歩きながら、自然を基盤にした地域社会の豊かさを探り続けている。共書に『環境の社会学』など。1972年生まれ。

---